

## 『特定非営利活動法人えがおつなげて』のご紹介

## ◆ 活動概要

農をはじめとした地域共生型のネットワーク社会を創ることを目的に、「村・人・時代づくり」を行っています。山梨県北杜市白州町を中心に、北杜市増富、南アルプス・八ヶ岳周辺、長野県飯島町、長野県小諸市、栃木県那須、茨城県常陸太田市、会津地域、三重地域、福岡地域、東京丸の内、などで、以下の活動を行っています。

えがおの学校、えがおの専門学校など農村都市交流マネジメントコーディネーター人材育成  
関東ツーリズム大学など都市のニーズと地域の問題解決を学ぶネットワーク

空と土プロジェクトや企業のはたけ倶楽部、やまなし企業ファームリーグなど、企業との連携での農商工連携、耕作放棄地解消活動

山梨エネルギーファーム、木質バイオマスなどエネルギー対策  
えがおファームによる農村都市交流プログラムやえがおマルシェによる農作物・加工品の販売他



## ◆ 表彰履歴

農林水産省(平成19年度)  
「オーライ!ニッポン大賞」受賞  
(財)あしたの日本を創る協会(平成20年度)  
「あしたのまち・くらしづくり活動部部門  
内閣総理大臣賞」受賞  
経済産業省(平成20年度)  
ソーシャルビジネス55選に選定  
SEOY日本プログラム(平成22年度)  
ファイナリスト選出



## ◆ プロフィール

設立：2001年2月

役員

代表理事 曾根原久司

1961年長野県飯田市生まれ。明治大学卒業後、フリーター、ミュージシャンを経て、金融系の経営コンサルトの道へ。バブル崩壊後、銀行などの経営指導に危機を感じ、95年、東京から山梨へ移住し、農林業を柱とした自給自足の生活を実践。01年NPO法人「えがおつなげて」設立。内閣府が選定する「地域活性化伝道師」235人中の1人に選ばれる。

えがおファーム農場長・理事 小黒裕一郎

1979年横浜生まれ。立教大学卒業後の4年間、自転車で日本・世界を旅した際に重要であると実感した自給的暮らしを実践するため、2005年に現在の居住地である山梨県北杜市に移住。NPO法人えがおつなげての農場・えがおファームの農場長として、持続可能な農業の実践と、農村を舞台としたグリーンツーリズムイベントの企画・運営を行っている。

本部所在地：山梨県北杜市白州町横手 2910-2

Tel:0551-35-4563 Fax:0551-35-4564

主要活動拠点：本部、開拓館[えがおつなげての古民家]、開拓館アネックス、えがおファーム & 都市農村交流センター鉾泉みずがきランド、東京事務所

URL：<http://www.npo-egao.net/>



# 山梨県の地域おこし協力隊

## 概要

山梨県で、40名の地域おこし協力隊員(農業協力隊員)を受入れ、JAや農業生産法人等の支援機関のもと各地域で活動。



## 内容

### 隊員の人材

・三大都市圏等の都市から男性35名、女性5名計40名を受入れ

### 設置根拠

・農業協力隊推進事業実施要綱

### 受入れ期間

平成21年10月～(平成23年度末まで)

### 活動内容

・農業活動(耕作放棄地解消作業、農作物の栽培)  
・地域おこし活動(地域共同作業、地域美化活動等)

### ポイント

・俳優の菅原文太氏をコーディネータとして、定住に向けた指導・助言、シンポジウムの開催。



農作業を行う隊員

## H22年度新規就農者確保・育成対策

### 新規就農対策(就農準備段階)

いつかは山梨で農業をしたい

本当に農業に向いているのか農作業を通じて確認

就農トレーニング塾の新設

農業協力隊

就農定着支援制度の新設

基礎より高度な技術を習得

果樹試験場における実践研修

親の跡を継ぎたい(学生・リターン)

農業大学校(本科・訓練科)

マッチング

就農相談会の充実

体験(交流促進)

就農を希望する若者との交流イベントの開催

### 担い手育成対策(就農段階)

就農時の初期投資や農地の確保を支援

園地リース促進制度の創設

〔リース用樹園地の整備を支援〕

機械等の初期投資軽減策の創設

〔就農に必要な機械・施設の導入を支援〕

いきなり独立の心配を解消(雇用就農)

農業生産法人の育成

〔JA出資型法人の育成、企業の農業参入、ふるさと雇用・農業協力隊による就農機会の確保〕

規模拡大に必要な経費や労力を支援

果樹農家規模拡大支援策の創設

〔規模拡大、省力技術の導入のための伐採に伴う無収入期間の経費等を支援〕

作業受委託組織の育成等

〔JA営農サポートセンターの拡大〕

栽培技術をサポート

〔普及指導員と篤農家が連携して支援〕

新規就農者等

担い手(地域農業のリーダー)

### 行政体制の強化

担い手対策室の創設

〔普及センター、就農支援センター、農業大学校との連携強化〕

### 現場でのバックアップ

ニューファーマー応援チームの創設

〔JAの支所、支店の範囲等で地域の実情に応じた担い手支援(オーダーメイド支援)を実施〕

### 試験研究の促進

省力化営農技術の研究を充実  
研究成果の早期普及  
(実証ほの設置、拡充)

農事組合法人 伊賀の里モクモク手作りファーム 代表取締役 木村修氏

木村氏は、農事組合法人伊賀銘柄豚振興組合（伊賀の里モクモク手作りファーム）を設立。手作りハム・ソーセージ事業からスタートし、体験交流型の農業公園を運営。年商47億円（平成21年度）の農業者集団を率いる。



木村修氏（左）と吉田修氏（右）

[写真：beフロントランナー]

所在地 三重県伊賀市

沿革 昭和50年 同志社大学経済学部卒業、  
三重県経済農業協同組合連合会就職  
昭和62年 同連合会退職、  
養豚農家16軒と農事組合法人伊賀銘柄豚振興組合設立  
平成4年 (有)農業法人モクモク設立  
平成6年 農事組合法人伊賀銘柄豚振興組合設立を伊賀の里モクモク  
手作りファームに名称変更

事業内容 農場・畜産加工場・食育学習  
施設の運営（ファーム事業）・  
通信販売事業・レストラン事業



組織図

### ＜経営に関する考え＞（注3）

#### ●生産、加工、流通、販売、サービスを一体化

ファーム事業は、14haの敷地で、ハム・ソーセージのほか300種類の製品を製造、ハム・ソーセージの体験教室などを開催し、ファームには年間50万人が訪れる。通信販売事業は、売上げの9割を4万人のモクモクネイチャークラブ会員が占め、レストラン事業は、ファーム内のほか、三重県・滋賀県・愛知県・大阪府に出店している。

#### ●マーケット重視

ファームには3つの大きな特徴がある。まず、消費者の心理を捕らえていること。次に、若者を引き付けていること。最後に、農村地域の活性化に貢献していること。

消費者の心理を捕らえる最初のきっかけになったのは、ハム・ソーセージの体験教室。同教室を通じて、消費者はメーカーとの垣根を低くしたいと思っていることに気づいた。以来、「消費者との垣根を低くする」が、同ファームの三事業を運営していく基本方針となっている。

#### ●利益最大化、売上げ拡大のみを追及しない経営

基本方針に基づき、4つの事業戦略を行っている。一つは、価格競争に巻き込まれないよう自分で商品に値段をつけ、自分で販売する。ファームの商品は、市販の商品より1割から3割高い。この価格差を納得してもらうため、消費者への情報発信を強化し、つくり手の思いやこだわりを伝えることにより新たな価値を創造している。（ブランド化）

二つ目は、顧客単価を上げる仕組みづくり。

三つ目は、顧客指向であっても顧客に迎合はしない姿勢。（ニーズのずらし）

四つ目は、営利活動と非営利（社会的）活動を一体化することによる相乗効果。顧客はある許容範囲を越えて事業者が収益を求めようとした場合、その事業を拒絶し二度と顧客に戻ることはない。

こうした視点から、ファームは事業運営上、6つのフィルターを設けている。①女性の視点、②本物の視点、③農業者の視点、④消費者の視点、⑤非営利の視点、⑥健康の視点、このフィルターが判断基準となり、ファームの成長を支えている。

#### ●顧客の組織化、リピーターづくり

ファームは、当初から消費者の中でファームの考え方や活動に共感を抱き応援してくれる人達を、会員として組織化してきたことも大きな特徴と言える。

#### ●共同経営、従業員との共同体意識

ファームは、三重県経済農業協同組合連合会を共に退職した専務の吉田修氏と共同で引っぱってきた。仏の修（社長 木村修氏）と鬼の修（専務 吉田修氏）と呼ばれ、二人揃って一つの役割を担っている。

従業員は、入社2年目からファームに出資できることやベンチャー企業的気風など従業員の“自分たちの会社”意識は強く、経営者と従業員に一体感が醸成されていることも特徴と言える。

●新規事業展開

今後は、環境への配慮や食農教育の充実から、福祉や医療への関わりまで視野に  
入れた事業展開を進めている。

(注3) 出典：「新しい農業の風はモクモクからやって来る」  
著者 木村修・吉田修・青山浩子 発行所 (株)商業界  
ホームページ <http://www.moku-moku.com/>



# ながさき南部生産組合

## 主な取扱品目

有機玉ねぎ・有機じゃがいも・南  
瓜・ミニトマト（アイコ）ミディ・  
スティックブロッコリー・オクラ

視察日：2011年12月9日

所在地：長崎県南島原市北有馬町城山下2465-1

設立年月日：1975年 平成3年9月 法人化

生産者数：118名



## 安全な食べものを長崎の大地から

「複合汚染」という言葉が流行した昭和50年代。農薬を大量に使って、大量生産している農業も加害者ではないかと省みて、食べ物と命の直結を痛感し、環境にやさしい農業へ転換を図って仲間を増やしてきたのが、ながさき南部生産組合です。

食の安全・安心は人任せにしないという観点から、内部監査に加えて生産者、消費者、専門家、学識経験者で毎年公開監査を行っています。

組合員になるには誓約書が必要で栽培管理等の組合の決まりを厳守しています。

組合員の皆さんは、環境にやさしい栽培方法で作った農作物が最も身体に良いと考え、地域の気候風土や作物の特徴などを踏まえながら、それぞれの作物のおいしさを最大限に引き出す生産方法に取り組んでいます。

そのため、生態系を重視した有機栽培や省農薬栽培を実施するなどしています。

具体的な一例としては、ミツバチによる交配を実施しています。

また、防虫剤は使用せず黄色のテープをハウスの中に張ります。中に含まれた殺虫成分を虫が吸うことで、死ぬ仕組みです。しかも、トマトに直接薬剤を散布していないのに、このテープを張ることも農薬散布一回とカウントしています。

しかし、近年の温暖化には苦慮しています。気温が高くなるのが2℃までなら、品種の適応能力でなんとか対応できるのですが、近頃の異常気象では昔に比べて気温が2.2℃高くなっており、これでは温暖化に対応できず、収穫量が減ってしまいます。

私たちの環境を守る取り組み、温暖化防止の取り組みも、美味しく安全・安心な野菜づくりのために、大切なことなのだと感じました。

### 一口メモ

ミニトマトの甘さ

ミニトマトの糖度を簡単に計る方法があります。水に浸けるだけで浮くか？沈むか？を見るだけです。水に沈むミニトマトは糖度が高く、8度以上あります。



黄色のテープには殺虫成分が含まれていて、その成分を吸って虫が死にます。しかし、トマトには殺虫成分が付着せず、影響はありません。



こちらの黄色いシートは粘着シートになっていて、虫を捕まえます。ハエトリ紙の新バージョンのようなもの。

トマト

### 参加理事の感想

ほとんどの農家で跡取りもしっかり育っているとのこと。誇りを持って日々作物を作っておられる姿を見て、これを絶やすわけにはいかないと考えるのだと、説明してくださった方のお話から感じました。

### 生産者よりコープしがのみなさんへ

「コープしがさんとは産直の理念が合う」と思います。商品だけでなく まるごと産直！人と地域もつながりましょう。顔が見えていれば農薬を撒くか撒かないか判断する時に違います。



